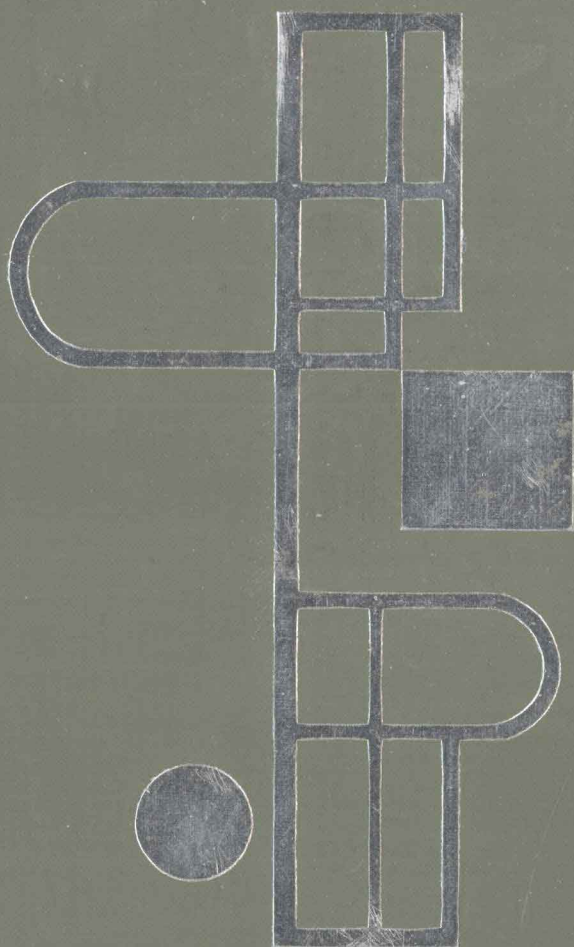
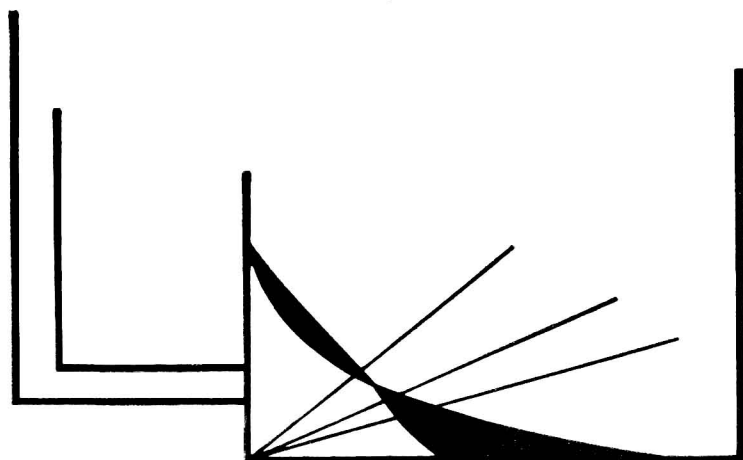




伊藤 整 集

新選 現代日本文學全集

15



筑 摩 書 房 版

新選 現代日本文學全集 15



新選 現代日本文學全集

伊藤 整 集

昭和三十四年八月五日 発行

著者 伊藤 整

発行者 古田 晁

印刷者 山田 一雄

発行所 筑摩書房

〔電話〕東京二九局(29)七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

製版 整版株式会社
印刷 株式会社精興社
本株式会社 矢島製本

伊藤 整 集 目 次

火の鳥	五
花ひらく	九
若い詩人の肖像	一七
伊藤整氏の生活と意見	三九
組織と人間	四七
近代日本における「愛」の虚偽	四三
異邦人意識と人類意識	四八
伊藤整のこと	四七
解説	四三
	佐伯 彰 一

装
幀

恩地孝四郎
恩地邦郎

伊藤
整集

—
むしばめる花

子供の泣き声が耳に入つて目が覚めた。眠りが足りないと思うと、私はすべてのことが厭わしい。もう眠れそうもないので、起きて鏡の前に坐つてみた。顔の皮膚は荒れていて、クリイムで拭つても汚れが残つてゐる。朝のうち風呂へ入るといいのだが、今の姉との生活では、私

Phoenix—a fabulous bird, of golden and red plumage, which, according to a tale reported by Herodotus, came to Heliopolis every 500 years, on the death of his father, and there buried his body in the temple of the sun. According to another version, the phoenix, after living 500 years, built himself a funeral burning pile and died upon it. From his remains a fresh phoenix arose.

(The Oxford Companion to
English Literature.)

には言い出せない。昨夜姉は風呂を沸かしてくれたのだが、私が帰つたときは大分冷えていた。姉は起きて寝巻のまま石炭をくべ出したが、タア子が泣き出した。「いいのよ、お姉さん、私ができる。タア子が泣いてる」と私は言つた。私は子供の泣き声が我慢できない。私の中に、いつまでも癒着しない傷があつて、そこに響くのだ。泣き声、子供の、赤ん坊の、人間の、猿の、あの泣き声が私には我慢ならない。あれが私にはたまらない。「そう、じゃ沸かして入つて下さいね。いやんなつちまうのよ。私がいなくてすぐ目を覚ますんだから。」姉はそう言つてガチャンと焚き口の蓋をしめ、冷たい廊下に出て行つた。その細帯をした後姿を、私は、汚らしい生き物を見るように見送つた。女は四十すぎても子供を産み、その子供のために、男への憎しみ怨みを忘れることができる。私は、女をそういうものとして証明して見せる姉をゆるすことができる。私は自分がきつい目をしてゐるのが分つた。私なら、と思つた。

そして、私は姉の父とちがう私の父を、どうかすると自分ですら「外国人」と思いがちな父の姿をちらと浮ばせた。昨夜、私はそのまま風呂を焚くのをやめて、自分の室へ戻つた。酒の酔いはさめ切つていず、私はあの、どうでもなるようになれという意識のなかで、それでも型を崩すまいとして服を脱ぎ、蒲団の中に滑り込んだ。寝巻は枕の横に畳まれたままだつた。何という顔だろう。眼の前にある拡大された

自分の顔、それは世間で言う、あの三十女の顔なのだ。あるときは、とても汚ならしく、あるときは、女の命のさかりのように見える。私は西洋の女のように早く衰えが来るのかも知れない。私の肌はほとんど白壁のように白い。日本の女にも白い肌はある。それは、東洋人に共通の赤い濁りから抜け出した間違ひのような白さで、たいてい美しい血の色を皮下に持つてゐる。私のはそうでない。私のは、何かの色、白く塗られたような、白いのが汚れであるような白さだ。髪は黒に近いが、大分赤味を帯びてゐる。私の肌は、少女時代、それから二十五歳頃までは、自分でもうつとりするように美しかった。私は何時間も鏡の前に坐つて、見ていたものだった。上級生や友達が私を見る目つきで、私は自分を眺めた。まぶしいような、うつとりするような、神聖なものを見るような目つき。この私は美しいのだ。ああいう目つきをあの人たちにさせずにおかないぐらい美しいのだ。私は自分の美しさに、その頃は、酔つていた。暗い所では黒く見え、明るい所ではやや藍色に見え、どうかすると緑色に近くなる眼の色、目と目の間が少し離れてゐるのが少女らしいあどけなさを作つてゐることも私は知つていた。その自分の顔を、私はあの黄色い、赤い、でなければ血の色の透いて見える白い皮膚と真黒い髪と眼を持つた日本の少女たちが、西洋の物語りの美しい妖精にあこがれる目つきで見つめるのを感じていた。だけど、彼女たちは怖いもののように

私の身近に來なかつた。私は美しかつた。しかし私は誰のSにもならなかつた。西洋人のメイドの生んだ子、いいえ、それではない。私の異質の美しさ自体があの人たちを近づけないのであつた。私と愛の告白をし合つたり、身体の接触をし合うのはあの人たちにとつて、怖ろしいことだつた。

そして、それが私をやるせなくし、私の毎日を、演技的にした。私はそのときから芸をしてゐた。七つまで英語で暮してゐた私は、父が帰国して母と二人、いいえ、間もなく姉と三人で日本語で暮し、日本の学校や友達の世界に入つたけれども、女学校に入ると英語は急速にうまくなつた。初め、それを私は自分の赤い髪と同じように恥じ、隠そうとした。しかしその卒業頃、私は自分の美しさが人の目を引くようになると同時に、自分の生まれに対して自信を持つて行つた。日本が中国で戦争を始める少し前、あの女子大学には秘密な社会科学研究会もあり、定期的に外語劇大会が催されてゐた。私の容貌と語学とは、そういう雰囲気の中で目立つた。私はロメオを、チルチルを演じた。いつも男役が私にまわつた。背が高いとか、動作がはつきりしてゐるとか言う口実で、私は主役を押しつけられた。そして学園生活でも、私はそういう役を持つてゐた。日本の家庭で、未来の同じような家庭の主婦になる鑄型にはめ込まれながら育つて來た少女たちは、自分の意見、自分の一

人立ちの心を持つていないのだ。何かにもたれ、絡まり、陰口を言う。私はそんな風に育たなかつた。父が帰国してから呼び寄せた姉に向つては、母は「フミ子、そんな歩き方は」とか「フミ子、足袋のコハゼはどうしたんです」と言うように、自分の附屬物としてやかましく言つたが、私に向つては、階級の違ふ人の預り子のやうに接した。父の記憶が、父の動作が、いつも私の中に現れるという予期と怖れで母は私を見ていたにちがいない。父の記憶が、私を日本人に饑餓することから母を妨げたのだつた。私は母にかしずかれて育つた。姉も次第にその母の調子を見習つた。父からの毎月の送金はきちんと正金銀行に払い込まれてゐた。つまりそれは私の金だつたのだ。戦争が近づき、為替相場が變ると、二十ポンドの金は日本の円で次第に多くなつた。私は空白な成長の中で、母や十ちがいの姉や級友たちが作る窪み、遠慮、期待などの中へ自分を伸ばして行くより外なかつた。英語の教師たちですら、私の発音の自然さに一目おいて、私を腫れもの扱いにした。私はその頃から、時々ヒステリックになつた。私が手を伸ばすと、すつと相手がつひ込む。その空白な周囲の苛立たしさ。それは恐怖のように私を駆り立てた。私は自分の鑄型を、父を求めた。父に手紙を書くことは禁じられてゐた。私には一人の妹、二人の弟が、イギリスに居るということだつた。私はある時ラムを読んで泣いた。それは、ちやんとした家庭で、落ちぶれた好ましくない

縁者が持てあまされる話だつた。私は母にも言わない悲しみを持つてゐた。私は姉に物をぶつつけ、何日も母に口を利かなかつた。母はおろおろし、足音を忍ばせて家の中を歩いた。私は学園であの秘密研究会に出た。黒い色の汚いカラーをつけた青年が階級構成の理論を説明し、五六人の学友が身体を固くして聞いてゐた。私はその帰りにもらつたパンフレットを何冊か読んだ。そしてそれつきり出なかつた。「どうしたのよ、エミちゃん、もう出席しないの?」と、男のようないかつい顔と身体をした同級生の村井さんが、教室の窓の下、乾いた下水の両側に脚を開いて、私に言つた。村井さんですら、私に向つては顔を近寄せない。私になにか触つてならない神聖な、また穢れたものやうに。私は「うふつ」と含み笑ひして、靴底でザクザクする下水溝の角をこすつてゐた。It can't mend my sole. と私はその時習つてゐた「ジュリアス・シーザ」の靴屋を引用したいところだつた。地下運動の資金募集の話があつたとき、私は村井さんに金をあげた。「これ、あなたにあげるのよ」と私は言つた。とにかく私に秘密をうちあけるところまで近づいてくれた村井さんに、私はあなたが好きだけど、もう少しで言うところだつた。私を学友と親しく結びつけたかも知れないたつた一つの機会はそれで失われた。

その頃私に、いいえ、私の不幸に気づいたのは会話の教授にいらしてゐた尼さんのアーメン

ガアド先生だつた。私に話しかけると、アーメンガアド先生の皺に蔽われた真蒼な大きな眼は、心持ち外の生徒へよりも長く注がれていた。私は私で、授業が終つて桜の並木の下を、校門のあたりまで神経痛の脚を心持ち引きずるようにして歩いてゆく先生の黒い尼僧服の後姿を、じつと見送つていた。

でも私は先生の姿が見えなくなると、すぐスカートをなびかすようにして階段を駆け下り、校庭の隅にある劇研究室に行くのだつた。私は花形だつた。その頃絶頂にあつた少女歌劇では、男役をする少女たちが花形だつたように、女の学校ではロメオになりチルチルになる私が花形だつたのだ。そして私はそのとおり振舞つた。自分の美しさにこだわらないこと、確信ありげに振舞ふこと、私にとっては学校が舞台だつた。見られて生きること、内側のむなしさを逃れて、見える自分を作り、皮膚や表情や動作で生活すること、火花のようなものを絶えず身のまわりに作つていくことが私の日常だつた。いつか私はアーメンガアド先生に話しかけるかも知れない。すると私は別な私になるかも知れない、と私は思つていた。でも私はそういう自分にならないように一生懸命やらなければならないのだと思つた。アーメンガアド先生とお話したりすれば、私は自分を失つて泣き出すだろう。私はみなし児だ。私はどこにも生きる場所のない捨児なのだ。よしんば泣いて、あの先生の胸にすがつたとしても、それが何だろう。アーメンガ

アド先生は私と同じじゃない。あの人だつて心は向うにある。大海と大陸を隔てた、古い文明と古い都市と古い生活と、そして私がその一人ではない群集とに、あの人はずながつている。

二

そして今、それから十年あまり時がたつて、私は、雀の囀つてゐる窓の前で化粧を落した自分の顔を見ている。怖いもののように、内証で私は自分に向ひ合う。なんという汚れだろう。きみに染み込んだ塵のようなものは、もう取れないのだ。あの黄色い、なめらかな皮膚には浸み込まないものを、私の皮膚は吸ひ取り、そして定着させてしまふ。あの聖画に漂うような、金色に反映する美しい少女時代の私の皮膚は失われた。そして顔の形が、頬、顎、輪郭、目鼻立ちが、私をぞつとさせる荒地のように拡大されて鏡に写つてゐる。モンゴリア型。目と目の間が離れ、頬骨が広く出ばつてゐる東洋の顔が、私をおびやかす。ほら、ねえ、と言うように。母が亡くなつてから、世帯の苦勞をした揚句私の所へもどつた姉を、私は母とそっくりだと思つた。だが、私もそんなのだ。皮膚の輝きの失われた私の顔の型は、それはあの母の顔だつた。そして次第に私はこの土地に結びつき、この東京に、日本の人間に混り込んで行くのが分る。だが私は氣を取り直す。顔は役者の私にとつては、カンヴァスのようなものだ。なかに、という氣持で、私はその恐怖をすつと踏み越す。

今私の前にある顔は、これはどうにでも使える。その上を一度塗れば、それは昔の少女の私以上の、どんな種類の美しさでも作り出せる。そして私は美しい、と自分に言いかけせる。自分がそう思い込んだ瞬間から、私の顔は美しく輝き出すような氣がする。何という考に私は慣れて来たのだろう。

扉を叩く音がして姉の顔がのぞいた。「ちよつと」と言つて、音を立てずにカーペットをふんで来る。いつでも小聲、猫のように、腰をかめて歩く。もうタア子の昼寝の時間らしい。姉は小さな封筒の手紙を差し出して、「昨日いらしたんだけど、留守だと申し上げたら、手紙を書いて……」

私は聞きながら文字を見てはつとした。杉山の手だ。

「それで……」と私は姉を見る。

「何ともおつしやらないで……昨夜忘れていたものだから。」

「ええ、いいわ、ありがとう。」

私が聞きたいのは杉山がどんな様子をしていたか、どんな表情だつたかということだけれども、姉はそこまで私の方に立ち入らない。出て行く姉の後から、

「食事もうすぐするわ」と言つて私は封を切る。事務所にも二度男の聲で電話があつたと言う。手帳を引き裂いた紙に「一度お目にかかりたいのです。面倒な話ではありません。吉良氏からも話して頂いたと思います。また参ります」と

書いてある。こちこちと固まつた見ていて苦しくなる文字だ。この文字の性格がすべてのあいう事の原因だつた。何かぞつとするような、自分の内側にある厭わしい記憶が群らがつて来る。網の一端を鈎^{かぎ}にかけてしまふと全体がやがて水の中から上つて来る時のように、つながつて群らがつて押しよせる。強い力で胸をしめつけられるような緊張が始まる。小劇場の文芸部室の乱雑な埃をかぶつた棚や背の破れたソファや、母がやつて来て玄關にたたずんでいた彼の下宿や、今と同じ字で書いた彼の売れない脚本の封筒にベタベタと貼つた切手など。それから、犬が爪先でしがみつこうに、「別れない理由ははどうでもいいんだ。おれは別れないんだ」と言つて、瘦せた身体で畳に胡坐をかけたまま、あらゆる筋肉を引きしめるようにしたあの人の顔が浮んで来る。

だが、それと重なり合うようにあの田島先生が、学園の大きな硝子戸^{がらすど}のはまつた談話室で、腰かけた私たちの前に進んで来たときの黒いズボンの姿が現れる。英文助教授の岩井女史は子供のようにはかんで紹介した。それを待つてゐる間、四十歳近くに見えた田島先生は岩井女史の戸まどいも私たちの緊張も全体として静かな作法の中に受けとつていた。あの歩きかた、片足ずつ意識して前へ出す慎重な落ちつきは、日本人の紳士のいかめしさと違ふものだつた。私は遠くに、あの煙草の匂のようなもの、父が家の中を歩きまわつた姿を思い出した。それからよ

く訪ねて来たマクカラアさんやマクカラア奥さんのカステラのような匂を。あの軟い、他人にも自分にも均等に気を配る注意深さ。あれは翻訳ものの上演になると、私たちの仲間に欠けてゐるものだつた。土岐さんも笛子さんも、みんな自分にだけ集中してこちこちの日本人になる。後になつて、それだと段々匂のついたもの、それは父と田島先生に私が嗅ぎつけた共通のものだつた。「私は先頃ヨーロッパの見学旅行から帰りましたので、向うの実験的な新しい演劇についてお話ししたいと思ひます……」ピネロウとダンセイニ、ビトエフ、ヴィニウ・コロンビエ、クレイグ、芸術座の話。純粹演劇と実験劇場。あの時のお話は、その後の蓄微座での稽古の間に絶えず聞かされた演技論と私の心の中で混り合つてゐる。しかしあの黒いズボンの片足ずつを静かに伸ばすように前へ出た先生の最初の印象、あれが私を蓄微座に引き込んだ本当のキツカケだつた。

そのあとで私たちは、一週間ほど前にすんだ外語劇のキャビュレット家の広間の場を立稽古の形でお目につけた。ずいぶん恥しかつた。セリフには自信があつたが、研究会長の岩井女史があがつてしまつていたので、それが皆に伝染した。田島先生は幕になると同時に「あなたは」と、私を指で差し、鋭い、はつとするようなきつい眼で私を見て仰しやつた。地で行つていてかなり上手だ。だがそれは、言わばあなた自身の顔や身体力を出しているだけです。ロ

メオは口実であるにすぎませんね。もつとも専門家の批評をしているのでありませんから、これは言いすぎですが、と。外の人たちには何も言わなかつた。そのあとで奥家先生と岩井女史に讃辞を呈されたとのこと。そして、私のことを訊ねていた女学校の英語教師に少し慣れた頃、突然田島先生のところへ呼び出されて、言わば夢中でアーニヤをやらされ、その後でびつくりするような厳しい稽古と、俳優仲間の意地悪さと、嫉妬の渦の中へ投げ込まれた。私の生活はそうして始まつたのだつた。杉山とのことも……

食事していると、タア子ちゃんが硝子戸のかけからのぞく。両手で硝子戸を押している。「オパチャン、オパチャン、ウマウマ」と言う。泣き声でないタア子の舌足らずの言葉は、恥しいほど、私の気持をやさしくしてしまう。私は不機嫌から暴力で引つ張り出されてしまう。暴力、子供の暴力は何をでも踏み越える。機嫌よくしているときのタア子の顔をちらと見ると、何か泉のようなものが私の中から吹き出す。胸に灯がともつたような気持になる。姉はタア子を遊ばせておいて、昨夜の風呂水で洗濯をしている気配だ。「いらつちやい、いらつちやい」と私は箸を持つて手を上げて招く。そして立つて行つて硝子戸を開け、膝の上にのせ、箸でつまんで一緒に食べさせる。子供の可愛らしさと、子供の世界が私に思い出させる不安は、紙一重だ。

その内部の、電球の内側のような小さな今の世界で、私はタア子と二人になる。その灯に私は心を暖め、頬ずりをするように、日向なたくさい黒いオカツバの髪の色をかく。そこへ姉が入つて来て、「あら、いいわねえ、タア子ちゃん」と手を肘まで赤くして何かを取りに室の方へ行く。すると、すつと私の小さな優しい心はかげる。私は不機嫌になる。タア子を膝にのせていたのを見つけたことの恥しさが、腹立たしさに変わる。その恥しさは、火花のように類を呼ぶ。姉は杉山を知っている。あれが杉山だと分つていて黙つている。そして杉山の方がまた、姉に私とのことを何か話したかもしれないのだ。私はこんな無邪気な顔をしていられない筈なのだ。今朝はこんな風にしていい日ではなかった。私は自分をゆるめなくなる。そうだと、こんな風にしていつも私の不安は始まるのだ。自分が仮りに、他人の眼にうつつただけの姿で破綻はたんしていいかと思ひ込む。それを私は自分にゆるめない。姉がその場を赤い腕をむき出しにして用事ありげに通つたこと、そしてタア子に向けておけば私は機嫌がいいと自得した気配。そんな風に見られている自分が私は嫌いだ。それだけで私は、自分に対しても姉に対しても、腹が立つて来る。私の世界は危くなる。私はやつと茶漬けにして食事を終え、タア子を、火薬が導火線どうけせんを逃げるように、「ほら、あすこ、ハトボツボ、チツチツツ」と言つて室の外に出

し、障子をビシヤンと閉める。

室へ入つて扉を閉めるとともにタア子の泣き声がする。私を追つている。こういう時、私は髪をかきむしりたい程その声におびえる。あつけない、と思う間に、水を流す音や「いい子、タア子、すぐね、すぐね」と姉が声をかけているその気配と関係なく、その泣き声は、私に、子供を産むのをやめるためにあの病院で寝ていた一週間の苦しさを思い出させる。それは更にさつきの杉山の手紙と引火し合う。私はその恐怖から逃げ出すように大急ぎで化粧する。目がしらに心持ち鬢かみをつけること。頬はただ日本人らしい肌色に、むしろ目立たなくし、顎や首筋に白さを残すこと。ほとんど一刷毛ひとしほでできる。私は持ちものを、机の引き出しや、昨夜のハンドバッグなどから、かきまわすようにして揃え、火のついた家からのがれるように、姉の磨いておいてくれた靴をはいて逃げるように飛び出す。足早に歩き、角を曲つたところから、ゆつくりと自分に帰る。そしてやつと、私は一人いる安らかな心になれる。

垣根に沿つて、小さな家々の門や踏み石や潜り戸などがある日本の生活の心づかい私は苦しむ。どこも同じだ。戦時、私と母とは父からの送金が絶え、三年目四年目はひどく苦しい生活だつた。そして杉山があんな芝居を企劃したのだつた。慰問興行という名目で、軍国主義の安芝居をうちながら、日本の各地、中国、台湾と歩きまわつた。ひどい出しものだつた。

チエーホフもオニールもいけなかつた。私は肌を隠そうとして強いオークルを使い、髪を染めた。作りものの日本人になつた自分の中に、私はいつも息をひそめ、あたりをうかがつて生きていた。内地の農村の小駅の話。あれだけがよかった。落語家、漫才といつも一緒だつた。東京へ戻つたとき四月かだと思つていたのに六カ月だつた。それでも杉山は強い。お腹の中で動いていたのに。私はあのとときの自分の顔が分る。絶えずあの命に向つている顔だつた。でも私は同意した。そしてあの郊外の小さな病院で。そのあと、私は自分が生きていることの意味をなくしたような気がした。生活のため、と私は考えなくなかつた。もつと生活が楽な時でも、私は子供はいらない筈だ。あの頃は、あの「芸術」という名をつけていた正体の逃げやすいものは、私の中で、戦争とイデオロギイと自分にかぶせた日本人の仮面のなかで、息も絶え絶えだつた。犠牲がなければ存在も確かめられないようなかすかなものだつた。私の芸のために、魚にとつての水のようだつたロシアやフランスやイギリスの翻訳劇は駆逐された。その中にひそんでいたあの人間らしいもの、私にとつては本当のヨーロッパよりもつと痛切な生きる場所だつた、あの日本でもヨーロッパでもない翻訳劇への執着は、あの犠牲によつて、私の中に生き残つたようなものだ。

恢復が思わしくないので一週間いたあの病院で、向いの室、隣の室で赤ん坊が生まれた。あ

の時から、私には赤ん坊の泣き声がたまらなくなつた。あれは猿だ。どこか遠い原始林の奥で枝にぶらさがつて、泣く。それは何か大きな動物に取つて食われる。一匹が不吉に叫ぶ。猿の群は波のように枝をざわめかして逃げる。小さいのが逃げ遅れる。それは助からない。それは血を流し、内臓を食われる。まだそれでも泣いている。泣いている。毎晩私は同じ夢を見た。そしてどこかの室の赤子の泣き声に目が覚めた。恢復が十分でない、と医者とのめろのをきかずに、私は退院した。退院した日、私は、発作を起した。あんな脚本を書いて、そして私の赤ん坊を殺して、と私は杉山にしがみつてゆつた。身体が思うように動かないのに、私は一晩坐つて、あの人も眠らせず、窓が白むまで泣いたり喋つたりしていた。

田島先生は私たちを棄てたように古典の翻訳に引きこもつてしまつた。でも座のものたちは生活しなければならなかつた。そして脚本部員で演出助手だつた杉山が軍国主義の自作の脚本で演出をし、監督をし、マネジャアをやり、軍部に交渉し、私たちを持つてまわつたのだつた。その生活の幹だつた杉山が、私を残してまた慰問興行に出かけると、私は、どうしてもあの人と生活することはできない、と思ひはじめた。あの舞台はいやだ。あの人はいやだ。旅先の杉山へそう言つてやり、私は母を呼び、母の家へ歸つた。杉山は旅から戻ると、やつて来て、どうしても別れない、別れる理由がない、と言ひ

張つた。しかしあの人の顔が私に思ひ出させた。あの晩の私の発作、病院の猿の夢、あつちの室、こつちの室で夜中に起るあのやるせない、動物のような、目でない泣き声、生きてゐる、生きてゐるという終りのない泣き声。私は父が残して行つたこの小さなイギリス風の館に閉じこもつて暮したかつた。あんな怖ろしい犠牲を払つた上にまだ髪を黒く染め、肌をオールドでつぶさなければならぬのか。私があの新しい演劇と結びついた頃知り合つて、あんなにも沢山の夢を託した元の美学科の大学生、あの杉山が、ああいう存在になつたこと、そしてあの人の間に生まれる筈だつた子があなつたことは、あの人の生活を目あてに何年もの間私の心に育つて来た衝動の全部でもつて、逆に私をあの人が隔てた。あの人をのがれることが、それが怖ろしいことのすべてからのがれることだつた。

杉山は何度もやつて来た。だが母は、いつも私が心を決めた時にそうしたように、私からあの人を押し隔ててしまつた。私は輕井沢に疎開して田島先生を訪ねた。田島先生も上京すると私を訪ねた。そして、三十歳になつた私は、五十歳の田島先生と、はじめ学校で先生を見たときのイメージが熟して来た当然の帰結のように結びついてしまつた。私が驚いたのは先生が子供のような人だつたことだ。そのうちに空襲、平和、過労からの母の死、姉の夫婦別れ、そういうことは私には、あれに続いた一連の運命の

ようなものだつた。どれも予期しないでいたことなのに、当然のことと思われた。だから戦後先生を中心にして劇団が再組織され、杉山は小説家になり、古い仲間の何人かは収入のよい大衆劇場や映画の引立役に走り、新しく若い人たちが加わつたことも、またイギリスのマクカラアさんから、父の死と私のために年金が続けられてゐる知らせをもらつたことも、みんな初めからきまつていたことのような気がした。

三

私にとつては、自然なものは何もない。自然なもの、それはたまゆらの、不安定な約束だ。私の生活はあらゆる仮りの条件で支えられてゐる。金、今の私は金に困らない。そのことを私は自分の悪徳のように思つてゐる。私は姉にはぎりぎりの生活費だけ渡し、姉をあの世間の主婦たちと同じような、絶えず財布の金と買うものを睨み合せるような表情に追い込んでおく。物価が上ると少し増額する。姉の表情がゆるむと、私は渡す金を引きしめる。あんなに私たちを悪夢のように追いつめ、窒息させた軍人の政治だつて、降伏してしまえばその実体は泡のようなものだつた。田島先生の奥さんのことも私は気にかけない。あのしとやかな夫人のあのしとやかさは、何も働いていない空まわりなのだ。私の肌は荒れ、しみが出来、母の表情がいやらしく浮び出て来た。でも私の身体は均衡が取れ、美しい。素顔は本当の顔を作るためのカンヴァ

スであれば足りる。舞台では、私は昔と同じ夢見るような少女を作る、前よりも一層確かに、一層効果的に。

私の芸と、その日常の意識とは表と裏。「桜の園」も「ウィンダムア夫人の扇」も、私がないと、薔薇座では舞台に穴があく。そして田島先生の演劇理論の体現者が私で、先輩大島さんよりも、薔薇座の力点となる女優は私だ、というのが、私についての定評だ。ヴェテランとか貴重な才能とか言う批評が私のために使われる。昔、私があんなに真直ぐな心で芸術を信じ、先生の言葉どおり表現を果たそうとし、祈禱でもするような気持で演じたときは、ぎごちないとか、芸が固いとか、幼いとか言われたものだった。私は先生と今のようになつてから、先生の芸術理論を信じなくなつた。先生の中には一人の夢想家、演劇の夢に取りつかれて、ヨーロッパをめぐり、十五年間悪戦苦闘して来た夢想家がいるだけのように思われる。私はその人、その夢を抱いたままいたわり尊敬している。それだけのこと。先生の口癖の、努力と修業による完全な演技などというものは、ありはしない。私は、先生を怖ろしい人でなく、いたわるべき人だと思つたときから自由になつた。私は学校でロメオやチルチルを演じた時と同じようにやる。あのロシアの演技マニア、スタニスラフスキイが、そして私たちの田島先生が、私たちに信じ込ませようとしていることと正反対にやる。私は私の美しさ自体を観客に納得させるために

脚本を使う。私は私の得意な女の型、夢想する若い女と、刺すような皮肉を言う中年か年寄りの女の役、そういう所を引き立てるために先生の演出を勝手に歪めてしまう。自分の昔の夢と自分の今の生活とを、自分の肉体の美しさの中に生かす。それを力まないで、軽く、弾みをつけて、やつてのける。私は脚本を、いいえ、芝居自体を手段だと思つている。

田島先生は、それを時々、私の解釈の行き過ぎだ、と言つて、直させようとする。私は稽古では先生の言葉に従つていて、本舞台では、やつぱり思い通りにやる。先生は初心の連中に、昔私に言つたのと同じことを繰り返かえし、原作の尊重、演技独立の教訓を繰り返かえしている。私はだまつて見ている。先生が女の子の演技指導を私にまわしてよこすと、私は型どおりきちんと教えてやる。本読みのとき、舞台稽古のとき、私は調子を合せている。そして初日から変えてしまう。私はあの学園にいた混血の美少女エミだ。一瞬で消える演技の中で何をためらうことがあろう。私は自分が虹のように舞台を貫き、舞台の生命になつていけるのが分る。

今日は二週間続けた「かもめ」のラク日だ。私は駅を下りて橋を渡り、銀座の裏通りを歩いて行く。時間はまだ早い。私は何かを忘れていような気がしている。私はまわり道をし、いいコーヒイを飲ませる濠ぶちの喫茶店に寄ろうと思う。そして私は思い出す。あのショウ・ウインドウにあつた白生地を買つておけば、この

次の衣裳のちよいどいい材料になる。私は目立たないスウツを着ている。私は舞台の外では、三十歳すぎた自分の顔について自分が錯覚を持つていて人に思われまいと心をきめている。

私は歩き方に気をつける。歩き方でほとんど人間の内容は分る。自分の内側にあるものをゆすぶつたり、壊したり、卑下したり、てらつたりしないで歩いている女はほとんどいない。ただ少女が幸福を感じているときの弾んだ歩き方、あれだけは私にできない。人妻、長火鉢にしがみついた恰好で歩いている。着飾つた娘、着物の中に入つて、やつとそれを支えて歩いている。あのショウ・ウインドウの前で、私は硝子の反射を避けて、巻いてある白絹の方へ少し屈んだ。すると中で「あら」という声が出た。さつき、そこへ入るのがちらと見えた、着物にもたれて歩くような金持ちらしい中年の女。「あの人、生島じゃない？」店員に言つていける。「？」という気配。私は聞えないしぐさ、腰をかがめたまま。有名な生島エミを見分けろというブルジョアの女の見栄。私はにがさと嬉しさの混つた気持ですつと飾り窓を離れ、持つていける金のこととを考えた。そして金が足りないのを思い出した。

昨夜、私はまた金を使つてしまつたのだ。ラクの日には、何か出る。今度の公演はずつと八分の入りだつたから、今の仕込みでは黒字と言えないけど、田島先生は新聞小説を書いているし、多少は、何かお手当てが出るだろうという

気持を皆が持つていたらしい。昨夜はその前で、誰も金のない顔をしていた。だが先生も昨日はまだ才覚つかなかつたようだ。劇場の横へ出たところに食物屋の店が並んでいた。誰も寄ろうと言わない。土岐さんの踵のつづれた靴、それに着ているのは戦争前からの灰色の汚れたオーヴァーだ。あれは私に、中国を、あの戦地を思い出させる。それから厭なその先にある連想。私は眼をそらした。すると効果の徳ちゃんが一ヴァーなしでだらりと袖の長いジャンパを着、ベレー帽を悲しいことに気取つて斜にかぶり、長い脛をしようがねえと言う風につき出してノソノソと歩いていた。笛子さんはあの悲しい女役者のニーナの気配そのまま、家においてある坊やが気になつて仕方がないというせかせかした様子。潮田さんには、形だけは新劇の古顔らしい、仕事は仕事だ、おれはやつて来たという充足感があつた。誰が今の新劇役者で金を持つているだろう。ほかの三四人は先生を取り巻くようにして少し先を歩いていた。何という悲しい貧しさだろう。私たちは何をしていると言うのだろうか。勝手に、舞台で何か悪徳の実践でもしたというのだろうか。あの戦時の文化統制の空気が魔物のように私の中で尾を引いているようだ。いいえ、それよりもつと古いものかも知れない。舞台にのせる芸のうち、最も純粋なもの、誇りをもつて演ぜられるもの、に携ふることに対する罰として、私たちに付きまとう運命かしら。大鳥さんの病氣の間、ヒロイ

ンのアルカージナを我がままに演じている私を、演技でもつておさえることのできたつた一人の人である潮田さんが、それをしようとしなはいばかりか、渋く控え目に立ち廻つて、私を引き立たせている。私と田島先生の結びつきが分つてからのことのようにだ。そしてこの人はいま、私の前を、いやおれはおれの氣に入るとおりにやつていただけだ、と言う恰好で歩いている。私たちが舞台から下りるや否や、寒々とした貧相な日常がみんなを待つていて押さえつける。でも私は、勝ちほこつた気持から抜け出せない。急に私は自分を罪ある人間だと感じた。私はうろたえた。私は小走りに先生へ追いついて、先生のまわりの人たちに言つた。「ねえ、おそばでも食べましょうよ、ねえ先生。」みんな黙つた。先生はためらつた。そう、私はその沈黙の気配を知つてゐる。昔は氣のつかなかつたものが、戦争の後には、はつきりした形で皆の心の中に住みついた。それはあの、金を持つてゐるものは悪人だ、どこかでおれたちから盗んでいる、という気配。それは電車の中や街上で人がたがいに見合うとき、そして古い知人が出逢うときにも、すぐ漂うものだ。私はあれが怖い。暖く着て、飽食する奴はゆるせないという気配が、すぐ沈黙の中に漂うのだ。今も一瞬間、生島エミちゃん、イギリスから来るお金か、という気配が皆の間に漂つた。その時誰かが後ろの方で、若い少年らしい声で「しめた」と言つた。それで皆が笑つた。それであの気配は吹き

とばされた。駅の前のもるい光の中へ来ると、潮田さんは少し腹を立てているような顔をしてゐた。おれは償われるのか、という顔。でもあの人はついて来た。笛子さんは待つてゐる子供を思い出して考える顔をし、「あたし……」と言いかけた。「いいでしょう。すぐ帰るわ」と私が言つた。

いつもの店へ行つて、五目そばをたのみ、私はためらつたが「ねえ、その前にお酒を下さいな、私たちが御婦人にハイボールを五つ」と言つた。酒が出て、男たちは飲みはじめた。私の金の入り道はみな知つてゐる。そして私がそれを殆ど出たために使うことも、姉にはかつがつ生活費しか渡さないことまでも知つてゐる。だけれど私は本当にでたらめに使うのではない。私はそれどころか金で買収したり、償つたり、機嫌をとつたりする形になるのを怖れている。田島先生が私にやかましく言つたのも、そのことだつた。今夜の仕方だつて、先生の氣に入つていないことを私は知つてゐる。外の男たちが先生のそばを何となく避けて坐り、そして楽しくに飲んでゐるのはいいのだが、潮田さんががつちりと骨張つた顔で、細面の半白の先生と向い合つてあまり楽しげでもなく飲み合つてゐるのが、少し氣になつた。

そのとき、いけないことに昔の仲間、潮田さんより少し後輩の飛島さんが入つて来た。戦後は映画会社で便利な脇役として何にでもよく出演してゐるらしい。映画人特有のけばけらしい

ジョーヌ系統のバンドつきのオーヴァーを着て、若い女を連れていた。「やあ、飛鳥さん、なかなか盛んですね」と徳ちゃんが声をかけた。飛鳥さんは前が大分上げ上つたのに耳のあたりの髪をきれいに刈りそろえて、いくらかどきまきしながら人のいい笑いを浮べ、田島先生と潮田さんの所へ行つて挨拶した。私は窓際にいた連れの女を見た。向うもこちらを見た。ああ、あの女優、新聞などに、よく写真の出る令嬢型で売り出している芸なしのダイコンだ。どうしても私は映画人を、あのノツペリした大衆向の均一菓子のような顔を軽蔑せずにいることができない。

その女優が私の方をちらと見た。その時のその映画女優の目つきが気に入らなかつた。私を知らないのだ。私を知らない女優はもぐりじやないか。飛鳥さんが、あのえへらえへらという笑いを浮べて行きすぎに私にうなずいたとき、私は、昔私をかばつてくれたこの善人に言つた。その女に聞えるように。「ねえ、飛鳥さん、いつも芸なしの人形ども相手じや名人も大変ねえ。」座がしんとした。かまうものか、と私は思った。立ちどまりそうになつて笑いを頬に残したまま、あの人はすつと通りすぎた。その通りすぎかたが鮮やかだつた。私は、甘くうすめたウィスキーがまわつていたのだつた。私は言つてしまつてから、軽い目まいのような酔いの中で、飛鳥さんの小劇場での二十年の苦勞が、自分自身すら捕えられない無能な一少女の伴奏

としての価値しかこの世ではないのか、というあの疑いにまた落ち込みそうになつた。間もなく飛鳥さんは女をうながして立ちあがり、そのまま出て行つた。客は私たちばかりになつた。

「飛鳥さん、あれはいけません」と先生が稽古の時そつくりのきつい声で向うから言つた。はつとして見たとき先生の眼は盃に伏せられていた。「いや田島先生、構わんです」と言つたのは、こちらに背中を見せている潮田さんだつた。私はそのとき、あの潮田さんの調子は、舞台で私を生かすように生かすようにと立ちまわる、あの気配と同じだと思つた。あの人は私を愛している。十五人が酒を飲んで五目そばを食べたら八千円になつた。今日生地を買えないわけだつた。私は今日どうかしている。

私はコーヒイを飲み川ぶちの店へ腰かけた。そしてあの手紙のことを思い出した。そうだ、あの手紙。あれだつた。ポケットから出して読み直した。何の用だろう。あの人が、私に。

「かもめ」は、静かな劇だ。アルカージナを演ずる役者のためには随分多くのシチュエーションがあつて面白いけれども、外のどの役も自分が完全に役を果たしたような気がしないらしい。性格の切れつばしのようなセリフだけがあちこちに散らばつてゐる。

「君たちはこの芝居では、一人一人、自分の役を十分にやつていないような気がするだろう。」

だから、きつと満ち足りないような気がするだろうけれども、たがいに言い合つてゐることの全体に注意したまえ。それがチェーフだ。そしてその全体がシンフォニーとなるためには一人一人が、自分は人生の切れつばしだけを表現しているという意識がなければならぬ。」先生の言葉。大鳥さんが、この所ずつと病氣なので私はこの芝居でふけ役のアルカージナをやつた。女優が女優の役をするのだから、うまくはまり込めば、引き立つ役だ。アルカージナは、でも、四十をすぎ、成年の息子を持つてゐる女優だ。やりにくい所が多い。派手な老け役。私は作りだけわざとこつてりして、地で行つてちよいといふように思つた。

今日はラクの日だと思ふせいか私は演じていながら役に溺れ、感傷的になつた。ところが二幕目のあたりから、客席のどこからか、私を見ている特別な眼があるのを感じた。むかし、母が来ているときは私は母がどこにいても分つた。それはどうも二階の正面の奥のあたり、一番見定めにくい場所だつた。私はあの人だと思つた。杉山にちがいない。私は落ちつきを失つて来た。トチる心配はなかつたが、控え目に内輪に内輪にとした。アルカージナの息子のトレーブレフがニーナに失恋して一度自殺しそこない、最後に自殺する。不吉な暗示になりそうだ。まさか、と私は打ち消した。四幕目の最後に息子が自殺するところで舞台裏で銃声がある。そのとき平土間の右手寄りの奥で不意に赤ん坊が泣き出し

た。赤ん坊づれの客を断わることができなかつたのか？ 静かな芝居なので、連れて来た母親のふところに眠っていたのが、銃声にびつくりしたらしい。キツカケがますますなつた。潮田さんの医者、ちよつと間をおき、泣き声をはずして言った。

「何でもありませんよ、あれはきつと私の薬靴の中で何かが破裂したんでしよう。」そこで医者は舞台裏をちよつと見に入り、出て来て、しんとなつてゐる皆に向つて、

「矢張りそうでした。エーテルの硝子壺が破裂したのです。」そして鼻唄を静かに口ずさんだ。そこで二節、それが次のキツカケである。

私はそれを危くのがすところだつた。赤ん坊の、あの病院で夜中に聞いたとそつくりな、静寂の中でのあの生命があえぐ声、ここに生命があると訴える声。それが先刻からの不安の続きのなかで、細い楽器の絃のように震えていた私の神経を、耐えがたく緊張させた。赤ん坊の声が乳房を含ませられたような含み声になり、はたとやんだ。そこで私は機械的に、ゆつくりと言つた。脅えから覚め切らないままで。

「ふう……私、ずいぶんびつくりした。あの音がすぐ思ひ出させるものだから、以前の……」私はそれが本当の救いのように、ト書きにあるとおり、両手で顔を蔽つて続けた。

「目の中が真暗になるような気持がしたわ……」言いながら、私はセリフをでなく、自分の心を、あの人と赤ん坊の泣き声の結びつきに脅

えたあの暗い心の奥をのぞいて、呟いていたのだつた。私は椅子にくずおれたままだつた。これで私の役はすんだ、と思ひ、傍で潮田さんが調子を下げて外の者に言つてゐるのを聞いていた。

「イリーナ・ニコラーエヴナを、何処かへ連れ出して下さらんか。実はコンスタンチン・ガヴリーロヴィッチが自殺したのです。」重い幕が下りた。私は動けなかつた。割れるような、津浪のような拍手。それはいつもの拍手とは性質のちがうものだつた。私はその中に揺られていた。ソデの所から足早に歩いて来たのは田島先生らしかつた。私の腕に手をかけ、力ずくでゆすぶるようにし、

「エミ子さん、今日のあなたは完全演技です。二幕目、コスチャの自殺未遂のあたりからの暗い調子、それから最後の自殺する音を聞いたところ。」先生は何かまだ仰しやつた。そう言えば戦後に劇団が再興してから、新聞などの批評がどんなに私をほめあげても、先生は何か私の演技には不満らしく、一言も仰しやらなかつた。でも今日の私の演技だろうか。私は二幕目から落ちつきをなくしていた。そしてあの赤ん坊の泣き声……

拍手が続いたせいでなく、ラクの日の習慣で、私たちは先生を真中にプロシイニウムにならんで、挨拶した。客は立ち、私たちは舞台上に戻つて祝ひ合つた。でも私は浮き立てなかつた。食堂の大津屋に先生が命じてあつたので、それか

ら私たちは扮装のまま食堂に入つてビールのコップを合せた。

「吉良さんがいらした」と誰かが言つた。若い人のように対の紺緋を着たひどく面長で、目の下の黒いこの小説家の新作戯曲を、私たちは次に上演することになつていたので、吉良さんはしよつちゆう小屋へ来ていた。もう皆と顔馴染みになつてゐる。吉良さんは田島先生のそばへ自分の席を作つてから、ずつと見渡して、先生と反対側の女の人たちに混つて坐つてゐる私を見つ、ぐるつと廻つて来て私の上に屈み込んだ。

「生島さん、ちよつと、私の友人で、逢えばあなたも御存じの方が、木戸のところでお目にかかりたいと言つていますが」と言い、返事を待たずに、先生の隣の席へ行つてしまつた。杉山だ、と私はすぐ思つた。

舞台での季節は秋、私は夏着のような、裾長の白い薄い服を着けていた。私は立ち上り、冷えきつて、人の姿のないロビーのすり切れた赤いジュウタンの上を急いだ。誰もいない木戸の段を二つ三つ下りようとして私は立ちすくんだ。もつと外かしら。ちらと私は、表の敷石の上に血を流して倒れている白い裾長の服の自分が目に浮ぶような気がした。私はそとへ出た。歩道の並木の下に外套の襟を立てた無帽の人、杉山だつた。風が片側から吹きつけて、私の反対側に、古風な襷の多いスカートを三角の旗のようになびかせた。「あなたなの？」私は近寄り、